

小児の言語獲得に関する研究

内 田 芳 夫

A study of Language Acquisition in children

UCHIDA Yoshio

キーワード：言語獲得 語用論 コミュニケーション インリアル

概要：小児の言語獲得に関して、生成文法理論から語用論への移行について、特に語用論的アプローチの一つであるインリアルの理論的背景とその変遷について述べた。さらに、小児の言語獲得における3つの視点として、子どものコミュニケーション、感覚（感性）の世界から言語（理性）の世界への移行、社会性と自我の育ちについて言及した。

1 はじめに

近年のコミュニケーション行動の研究は、「From Speech to Communication」という視点から、「From Communication to Speech」という視点へと移行し、言語の伝達機能を重視する動きが見られる（内田・他、1992）。このようなコミュニケーション行動の研究動向の中で、コミュニケーション障害児に対するアプローチも多様な形態で展開されている。その主要なアプローチとしては、1) 発声・発語訓練を主とする音声言語学的アプローチ、2) オペラント原理に基づく行動療法的アプローチ、3) 認知理論に基づくアプローチ、4) 知的行為形成理論に基づく形成論的アプローチ、5) 言語の伝達機能を重視する語用論的アプローチ等である。

本論では、語用論的アプローチを理論的背景とするインリアル・INREAL（Inter Reactive Learning and Communicationの略）について取りあげる。インリアルは、1974年コロラド大学のR.Weiss博士によって開発された言語発達遅滞児のためのコミュニケーション・アプローチである。インリアルが小児の言語獲得にとって有効なアプローチであると考え理由を以下に述べる。第一に、子どもの発達にとって最初の自然な活動・主導的活動である遊びを取り入れていること、第二に、発語の見られない子どもから適用でき、非言語的行動あるいは前言語的行動も視野に入れたコミュニケーションアプローチであること、第三に、

子どものコミュニケーション能力を高めるばかりではなく関わり手のレベルアップを促すアプローチである点である。特に、ICFの概念からすれば、障害とは環境との相互作用であり、また発達とは相互の関係の発達という認識になる。子どもとのコミュニケーションが取れないという場合に、子ども側の障害ではなく、関わり手が子どもの発しているシグナルを読み取れない、関わり手の手段を持っていないという大人側の障害が大きく関与している事態が想定される。第四に、コミュニケーションの主導権は子どもにあり、子どもの動機系を大切にしたアプローチであること、第五に、狭義の遊戯療法を超えて、小児の発達段階を踏まえ認知的な視点も視野に入れたアプローチであること、コミュニケーション障害のあるすべての子どもにかかわることが可能なアプローチであること等である。

次にインリアルの理論的背景とその変遷について、日本特殊教育学会シンポジウム資料（竹田、1990）を参考に述べる。インリアル開発前には、Chomsky（1957）の言語学理論やPiaget（1968）の発生論的観点から見た言語と思考の研究等がある。最初のINREAL（1974）の理念は子どもにとっての自然な環境での言語学習の促進にあった。遊びを主体とした学習であり、SOUL（Silence, Observation, Understanding, Listening）という基本的態度及び7つの言語心理学的技法を取り入れたアプローチである。その際、関わり手の

大人は子どもの負の要因だけに焦点を当てることのないように、また大人自身の行動と子どもへのインパクトの意味をモニターし評価しながら関与することが求められる。インリアルに寄与した理論としては、Brown (1969) の育児語研究、Snow (1972) の母子間の会話の発達研究、Dore (1975) の言語行為の発達研究、Bates (1977) の「From gesture to the first word」、Bruner (1976) の「From communication to Language」等の研究が挙げられる。これらの語用論的アプローチは、相互作用や前言語的伝達、さらには伝達機能や伝達意図等がキーワードとして取りあげられた。そして、1984年にINREAL (Inter Reactive Learning and communicationの略) となり、今日のコミュニケーション・アプローチとなった。日本への導入は1980年であり、インリアル導入の観点として大人の感性を高めることや良いコミュニケーションの具体的モデルを構築することであった。

II 小児の言語獲得における視点

1 子どものコミュニケーション

一般的に、1歳を過ぎると一語文(単語)が見られ、2歳半頃には二語文が出現するが、言語獲得には多くの機能が関連し合っている。1980年頃までは、子どもの生活や文脈と関連なく、言葉を教え込む傾向が見られたが、今日では、発声や指さし、身振り等の前言語的コミュニケーションに注目した関わりが、言語獲得にとって重要であることが明らかにされている。前言語的コミュニケーションとして、視線や表情を介した情動的コミュニケーションや指さし等が良き例である。さらに、イヌを見て「あー」という発声があると、子どもと大人の間で「注意の共有」が生じる。このように、物(モノ)を媒介に他者と、他者を媒介に物(モノ)と関わり合えることができる「三項関係」の世界の成立が言語獲得の土台でもある。「三項関係」によるコミュニケーションは動作による対話とも言われるので、発語はないけれども大人と子ども、あるいは子ども同士でボール遊び等ができれば、ことばの世界に接近していることを物語っている。ことばは概念であり、その前兆概念が見られる。例えば、帽子を頭にかぶり、靴下を

足に履くことができる子どもであれば、ことばで「ぼうし」とか、「くつした」と言語表現ができなくても、動作レベルで対象のイメージができていることを示唆するものである。したがって、その生活体験とことばの意味が結びつくことによって、ことばが生じるのである。さらに、子どもの感覚をフルに使った遊び体験も大切となる。子どもとのコミュニケーションで重要なことは、関わり手である大人のコミュニケーション感度を高めることや、子どもの発信を待つて良き聴き手になること、子どもの自発性を尊重すること等である。

2 感覚(感性)の世界から言語(理性)の世界への移行

言語獲得の原型として、対象物(モノ)との関わり合いと人との関わり合いを統合させ、モノを介して人と、人を介してモノと関わり合える、いわゆる「三項関係」の形成が重要である。通常は、人への関心がモノへの関心より先行し、他者が注意を向けているモノの世界に自分も注意を向ける「共同注意」が発達する。また、3歳半から5歳にかけて共感の世界が広がるが、共感の力が高まる際に関わり手(大人)の共感力が影響すると言われる。したがって、子どもがモノの世界・事物の世界に共感して触れることができるためには、大人は子どもの良きモデル的存在の必要がある。感覚(感性)の重要性について、ルソー(1962)は「エミール」の中で、「初期の教育はだから純粋に消極的でなければならない」と述べ、考える力(理性)を育てる前に、感覚器官をしっかりと育てることの大切さを語っている。また、「最初の哲学の先生は、わたくしたちの足、わたくしたちの手、わたくしたちの目のだ」とも述べている。自分の諸感覚を使って世界に出会うことなしに、他者の理性(言語)によって世界を知ったかのようにになると、自分の周囲を実感的に理解する時に不安定な理解になってしまう。ことばの語源に関する興味深い事例を紹介する。「耳って、語源は草の実なんですってね、左右に二つあるから実と実ですね。草は芽(目)を出して、花(鼻)を咲かせて、実(耳)をつけるでしょう。だから

人の認識についても、まず目で世界を見て、次に感覚をはたらかせて理解を深めて、最後にいろいろ情報を聞いて、耳で認識に至るという考えが、古代にあったようです（谷川・山田、2010）。人間と自然との繋がりについて示唆に富む語りである。感性の重要性について、もう一つ紹介する。「雪が溶けたら～～になる」という問いに対して、双生児のうち一人のお子さんは教師の期待通り「水」と答えマルをもらうが、もう一人のお子さんは「春」と答えた。ところが、その答えに教師はベケをつけたというエピソード（大田、1990）であるが、理性の世界だけでなく、自然現象を感性豊かに表現した子どもへの共感が子どもの育ちにとっても大人の育ちにとっても重要であることを示唆するエピソードである。

3 社会性と自我の育ち

社会性とは、個人が自己を確立しつつ、その年齢段階にふさわしい対人関係能力を発達させることである。人間は社会的動物とも言われるように、他者と関わるができる社会的存在として誕生するとの考え方が一般的である。社会性の発達には、模倣や観察学習などによって、さらに、人間や動物への情愛の絆である愛着行動の発達によって獲得される。生後3ヶ月頃から社会的微笑が出現し、「おはしゃぎ反応」が活発になり、生後6ヶ月頃に見知らぬ人に対して人見知りが見られるようになる。1歳頃に事物を介して他児とやり取りが可能になると、子ども同士の「いざこざ」が生じる。未だ、ことばによるコミュニケーションが十分でない段階では、相手を叩いたり噛んだり攻撃的な行動となるが、その行動の背景には他児と一緒に遊びたいという子どもの発達要求が潜んでいる。自分の行動や感情をコントロールできるようになることは、子ども時代のみならず人間の成長・発達のプロセスで重要な課題である。1歳頃から、「～～したい」という思いが強くなり大人の指示通りには行動しなくなり駄々をこねることが見られる。そのダダコネ現象が1歳半頃になると、「～～ではなく～～だ」という認識ができ、こだわりからの脱却が見られる。2歳頃から、いわゆる「第1次反抗期」・自己主張が見られ3歳

から4歳にかけて急激に増加し、一方で4歳から6歳にかけて自己抑制が緩やかに発達する。荒木（2007）は自制心の形成過程について次のように述べている。「反抗」は4歳頃になると相手を意識した「自己顕示」になる。したがって、相手から賞賛されると誇りを感じ、負の感情にとらわれると自我が萎縮し「引っ込み思案」になってしまうのが4歳頃の特徴である。5歳頃になると他者からの指図ではなく、心の中に自分が自分を指図するという自己抑制の力が誕生する。いわゆる、「自制心の形成」であり、「～～だけれども～～する」という精神的な自律が芽生えてくるが、依然として強く親しい大人との精神的依存関係を必要とする発達段階である（荒木、2007）。また、この時期には、「もう一人の自分」との対話（自己内対話）が始まる時期でもあり、他者のまなざしを自覚し、一方で自己を意識することによって自我の拡大が促進される。

III まとめ

小児の言語獲得に関して、生成文法理論から語用論への移行（From Communication to Speech）について、特に語用論的アプローチであるインリアルの理論的背景とその変遷について述べた。さらに、小児の言語獲得における重要な3つの視点について言及した。今後の課題として、発達の実理の一つである発達連関に焦点を当てた理論的・臨床的な研究が必要である。

引用文献

- 荒木穂積・白石正久（2007）発達診断と障害児教育、青木書店
 大田亮（1990）教育とは何か、岩波出版
 Rousseau・ルソー（今野一雄・訳 1962）エミール（上）
 竹田契一（1990）INREALの理論的背景とその変遷、日本特殊教育学会第28回大会シンポジウム配布資料
 谷川俊太郎・山田馨（2010）ぼくはこうやって詩を書いてきた 谷川俊太郎、詩と人生を語る、ナナクロ社
 内田芳夫・相星久美子（1992）障害児のコミュニケーション行動の発達、鹿児島失語症研究会会誌、3（1）